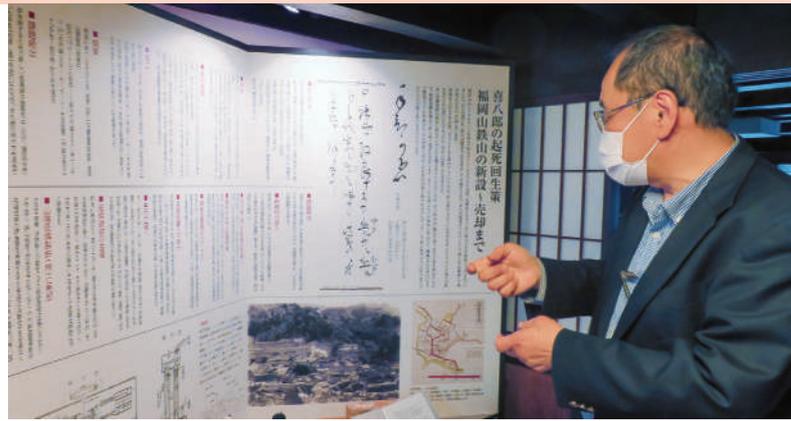


生涯にわたって学び続け、その「学び」を社会の中で生かす。「学び」から「行動」へ  
**地域で展開される住民参加の活動や NPO 活動などをとりあげます。**

今号の  
 視点

古代から近代まで行われた奥日野のたたら製鉄。その記憶がまちから失われようとしていました。故郷の大切な記憶を掘り起して見つめ直し、後世に残したいと活動する「伯耆国たたら顕彰会」取材しました。



左) 会長の佐々木幸人さん 右上) 事務局長の近藤登志夫さん 右下) 都台山たたらにあった高殿（製鉄工場）の再現模型

たたらは、はがねの郷の宝もの

## ～ 伯耆国たたら顕彰会（日野町）～

### 「たたらって何!？」からはじまる

まちから忘れ去られようとしていた、たたら。突如として、その記憶が呼び覚まされることになったのは20年ほど前。「きっかけは、中小企業庁が支援する全国展開事業に採択されたことでした。日南町商工会と一緒に採択されて。私は広報をしてくれと誘われて参加しました」、そう話すのは佐々木さん。商工会員を中心としたメンバー11人からなる「伯耆国たたら顕彰会」の会長を務めます。「ぼくは親戚に誘われて。その頃、鳥取に帰ってきたばかりで、視察旅行に行きたくて入会しました」と同会事務局長の近藤さん。「視察旅行では県立公文書館や智頭町に行きました。バスの中で見たスタジオジブリの『もののけ姫』などのDVDが、たたらに触れた最初でした」と当時をふり返ります。

### 「たたら」とは

たたら製鉄はわが国古来の製鉄技術。砂鉄と木炭を粘土製の炉（ろ）に入れ数十時間かけて精錬する方法です。炉の底には鉄のかたまり「鋳（けら）」が生まれ、その中から日本刀の材料となる高品質な玉鋼（たまはがね）が取り出されます。奥日野や奥出雲などの中国山地で多く採れた砂鉄は不純物が少なく、鋼を作るのに非常に適していました。炭素を2%ほど含む鋼は柔らかくて折れにくくなり、焼き入れをすると硬くもなります。研ぐと鋭い刃になります。



鋳（けら）▶

上の写真は、高殿を10分の1サイズで再現した模型の内部。たたら操業の様子はメンバーの手で復元（都台山たたら資料館）

## 掘るほど奥深い世界にはまる

佐々木さんが声をはずませます。「調べると意外と壮大な歴史ロマンがあって、どんどんはまりました。町づくりのためというよりも、もう興味本位」。会を結成して15年。毎年、たたらたたらの研究者を招いたフォーラムを開き、奥日野のたたらについて知識を蓄えてきました。近藤さんが続けます。「鉄の成分を追究している研究者、地質学から話をする研究者。考古学に刀剣、いろんな切り口があって掘るほどに奥深い」。一回の講演会には100人ほどの住民も参加し、ひろく知識を共有しようと取り組んでいます。「知識があるメンバーは、影山猛先生かげやまたけしだけでしたから。根雨高等学校時代の元校長先生です。ぼくの家うちに古文書が山ほどあって、ずっと手弁当で40年くらい調査されました」と話す近藤さんは、日野郡で最後の鉄山師、近藤家9代目当主でもあります。家に鉄山経営についての貴重な資料が膨大にあることを知り驚きました。

## 感激の連続！フィールドワーク

「私が感動したのは、メンバーの藤原洋一調査員ふじわらよういちと日野川原流に行ったときでした。川幅1メートルぐらいの兩岸にびっしり、たたらをした形跡を発見しました。川床に、たたらで流した金くそかなに粘土が集まって、そこに鉄分が張り付いて岩盤になってい

て。一体どれだけたたらをしたら、こんな川床ができるんだろうっていうくらい」と、佐々木さんの言葉に熱が入ります。「日野町には500か所以上のたたら場の跡が発見されていて。現地に行くと、これ全部を人の手でやってたのかって驚かされます。知識がないと、ただの森の中です。でも知識があると、ここに高殿たかどの（製鉄工場）があって、金池かないけ（冷却設備）があって、この石には製鉄神、金屋子神かなやこなどを祀る神社があってと頭の中で再現される。うわ、すごいです」と近藤さんが目を輝かせます。



遺構を調査する様子 今も豊かな自然が残る

## 企画やたたら操業も自分たちの手で

アイデアマンの杉原幹雄すぎはらみきおさんが企画案を次々と打ち出しました。杉原さんはプロのコンサルタン

The multifaceted nature of tataro  
多彩なたたらの魅力

たたらの魅力の一部を紹介します！

ミニたたら操業  
MINI TATARO



令和8年3月22日(日)  
米子市児童文化センター  
で操業予定！お楽しみに！

ミニでもこの迫力！たたら製鉄は、いわば古代の科学技術。単なる経験則の積み重ねではなく、材料の性質・温度管理・空気流量・炉の構造などの要素を体系的に理解し最適化してきた技術体系です。

刀剣の魅力  
TOUKEN and YAIBA



伯耆国の刀工、伯耆安綱（ほうき・やすつな）。国宝「童子切」、重要文化財「鬼切」を今日に伝え、刃に反りをつけた日本刀の始祖とされています。鳥取県は日本刀の源郷でもある！？安綱ゆかりの地を巡るツアーも人気でした。

「某ゲームに童子切安綱が実装されました」と佐々木会長も動向を注目！

そばの栽培と風土  
SOBA and FUDO



たたらにまつわるグルメといえば、そばが代表。砂鉄を採取した跡地や木炭づくりで伐採された山林は、のちに田畑として利用されることもありました。やせた土地ではそばがよく育ちます。まさに風土がFOODを育てました！



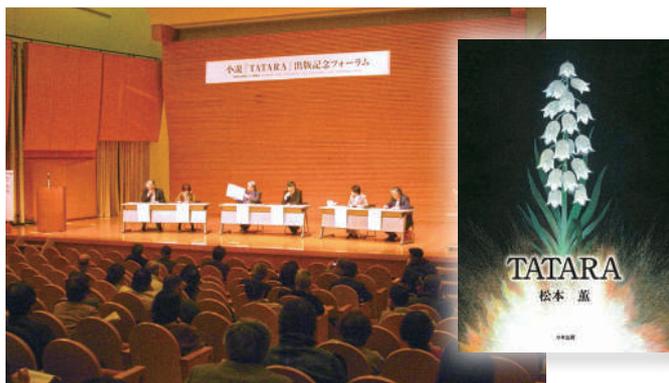
出雲街道根雨塾二番館 そば道場たたらや（たたらの案から徒歩すぐ）

ト。学び舎づくり、夏季のたたら楽校、ガイド本作成、ガイド養成、フォーラム、たたら検定にウォーキング大会。特産品をつかった料理開発に至るまで、短期間で計画を次々に実現していきました。活動拠点であり学び舎でもある「たたら楽校」根雨楽舎の内装も杉原さんが手がけました。解説パネルには、山内（たたら場がある集落）の様子のほか、明治時代の会計帳簿などが紹介されています。

ミニたたらの操業に成功したのは山本裕二さん。15年間データを取り続け、砂鉄から3割の鉄が作れると上出来といわれる中で、5割を超える鉄を作る技術を開発しました。「安全性も確立しています。ものすごい領域です」と佐々木さんは笑顔。



杉原さんがみずから描いた展示パネルが並ぶ校内



### 出版記念フォーラムの様子

小説『TATARA』は、主人公「りん」を中心に、明治時代にたたらで栄えた日野谷を舞台にした物語。激動の時代に翻弄されながらも前を向き、ひたむきに生きる人々の姿を描きます。松本薫著／伯耆国たたら顕彰会発行／今井出版／2010年

## 小説『TATARA』が反響を呼ぶ

たたらの認知度が上がったきっかけは、米子市出身の作家、松本薫さんによる小説『TATARA』の出版でした。一般にひろくたたらを知ってもらいたいと考え、会から松本さんに執筆を依頼しました。時代考証がほぼ史実から外れていないと佐々木さん。西部地区で自費出版物が1,000部売れたらベストセラーという中で3,500部を売る大ヒット。「明治時代は、山内で働いていた人のことを“たたらもの”と呼んで区別をしていました。白米が毎日食べられるような特別な集落でしたから、ひがみのようなものがあつたようです。それで誰もたたら場で働いていましたと言う人はいなくなった」と近藤さん。「それが小説が出ると一変して、『うちのおじいさん、たたらで勤めてたんですよ』というような声が上がりはじめて。昔は引け目があつたけど、今だったらそれが言えるようになったという感じがすかね」と佐々木さんはうなずきます。

## 豊かな自然、人々の記憶を後世に遺す

年少の頃、佐々木さんも近藤さんも、たたらがどういったものだったのかを家族や地域の人から聞いたことはありませんでした。長年の活動や小説のヒットをとおして、地域の人にもようやくたたらが知られるようになったと喜びます。一幕末から明治時代に、このまちで作られた鉄が新国家の発展に貢献したのだ。全国の人口が4千万人しかいなかった当時、まちは3万人が暮らす鉄生産の一大重工業地域だったのだ一。

「江府町の下原重仲しもはらしげなかが書いた『鉄山必用記事』という古文書には“小鉄七里こがねしちり、炭三里すみさんり”という資材調達の範囲についてのアドバイスが書かれています」と佐々木さん。「特に木炭の材料である樹木が近くなると、たたら場は樹木が豊富な別の地に移転しました。そして30年ほどして樹木が育つと、人々は戻ってきてたたらをする。その営みがずっと繰り返されてきたまちなんです。その記憶をひろく伝え、後世まで遺したい」と近藤さん。神話の昔から自然と共生しながら鉄を作り、人々が暮らしていた奥日野。ここには、水、森林、良質な砂鉄、そして鉄を産する女神と語らう人間のわざが息づいていました。故郷に魅せられて活動は続きます。

問合せ先

伯耆国たたら顕彰会

〒689-4503 日野郡日野町根雨645  
たたらの楽校 根雨楽舎(日野町公舎)



たたらの里 奥日野 Houki たたら Navi.